

第11回 IIC 大会に参加して

西 浦 忠 輝

1. はじめに

昭和61年(1986年)9月21~27日、ボローニャ(イタリア)で IIC (The International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works; 国際文化財保存学会)¹⁾ の第11回大会が開催された。筆者は今大会に、前大会(第10回パリ大会)^{2)~4)} に続き、参加し発表を行った。かかる国際学会への参加は、その分野における最新の研究動向を知る上で、また、その分野の多くの海外の研究者と知り合い直接話し合う機会を持てるという点で、極めて意義のあることである。特に、次回第12回大会は、アジアで初めての大会として、1988年9月に日本の京都で開催されることが決定している。そこで、今大会の内容の概略を紹介し、文化財保存の研究の国際化を推進する上での参考資料としたい。

2. IIC 大会

IIC 大会の今回のテーマは「Case Studies in the Conservation of Stone and Wall Paintings (石と壁画の保存についてのケーススタディ)」で、参加者は29ヶ国から473名にのぼった(表-1)。参加者のほぼ四分の一は地元イタリアからで、そのほかイギリス、アメリカ、フ

表-1 第11回 IIC 大会参加(登録)者国別内訳

イタリア 120(8)	イギリス 90(8)	アメリカ 64(6)	フランス 49(1)
スイス 28(3)	西ドイツ 19(2)	オーストリア 13(2)	スペイン 12
スウェーデン 10(1)	デンマーク 10	ベルギー 8	ポーランド 8(2)
オランダ 6	カナダ 5	ポルトガル 4	ノールウェイ 4
日本 3(1)	ギリシャ 3(1)		
ハンガリー(1), フィンランド, オーストラリア, モナコ, ユーゴスラヴィア 各2			
チェコスロヴァキア(1), ペルー(1), インド(2), イスラエル, マルタ, BFPO 各1			

カッコ内は発表者(ファーストオーサー)の延べ人数

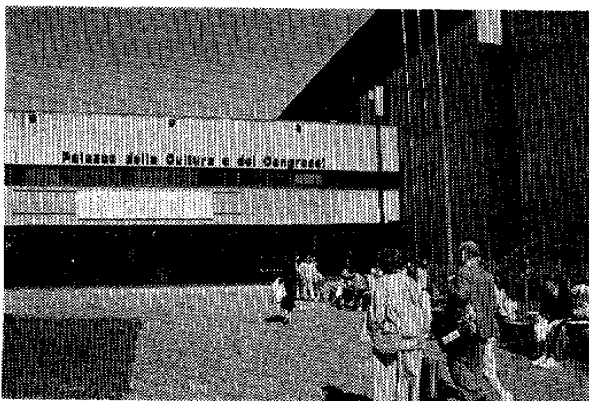


図-1 第11回 IIC 大会会場



図-2 第11回 IIC 大会風景(開会式)

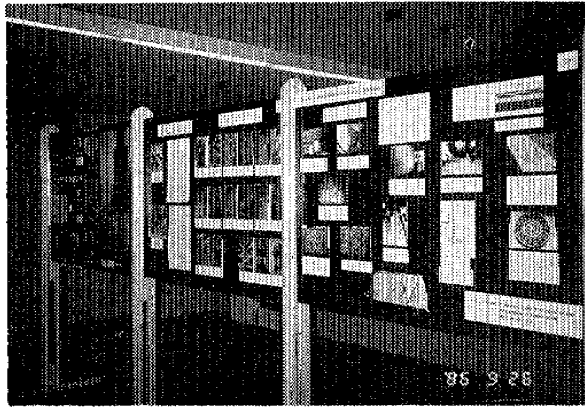


図-3 第11回 IIC 大会ポスターセッション

ロッパ・ホール (Sala Europa)" で行われた (図-1, 2, 3)。大会中の公用語は英語と伊語で、相互に同時通訳された。

筆者は「Conservation of Rock-cliff Sculptures in Japan (日本における磨崖仏の保存)」の演題で、我国における磨崖仏の保存と修復の問題点に、筆者らの最近の研究成果を含めて発表した⁶⁾。大地と直結した脆弱な石彫像の保存の困難さと、保存の基本である水を断つ方法についての最近の研究成果について述べたが、出席者の興味を引き多くの質問が寄せられた。

さて、以下、今大会のプログラムを邦訳し紹介する。各演題の後の () 内は発表者の所属、名前、国籍、その後の [] 内は発表言語を示す。

第11回 IIC 大会プログラム

——石と壁画の保存についてのケーススタディ——

1986年9月21~27日 於 ボローニャ (イタリア)

第1日目

14:30~17:30 参加登録

20:00 歓迎レセプションとコンサート (於、ボローニャ市オペラ劇場)

第2日目

10:00 開会式

10:30~12:30 第1セッション

<座長> 大英博物館保存部 W. アンドリュー オッディ (W. A. Oddy, 英)

- ・セプティマス セベラスのアーチ門の保存 (ローマ考古保存センター, R. Nardi, 伊) [伊]
- ・英国文化財保存財団 (National Trust) における彫像の修理と保守 (英国文化財保存財団彫像担当, T. Proudfoot, 英) [英]
- ・スペインからメトロポリタン博物館に移築された教会奥室の保存 (ICCROM, A. E. Charola 他, 米) [英]
- ・ベルニーニ作大理石海神像の保存 (ビクトリアアルバート博物館, J. H. Larson, 英) [英]

14:00~17:30 第2セッション

<座長> ローマ中央修復研究所, パオロ モーラ (P. Mora, 伊)

- ・オーストリアの古い漆喰; 技法, 彩色, 耐久性 (連邦文化財保存修復部, M. Koller 他, オーストリア) [英]
- ・漆喰壁固定材料としてのアクリル系接着剤の応用 (ニューイングランド州文化財保存協会, M.

W. Phillips, 米) [英]

- ・ポンペイのメナンダー家の中庭の壁画の保存<中間報告> (ローマ中央修復研究所, P. Mora 他, 伊) [伊]
- ・フリブルグ近くの小さな礼拝堂の壁画の修復 (美術歴史博物館保存修復センター, J. Horky, スイス) [英]
- ・システィース礼拝堂のミケランジェロのフレスコ画; 彩色技術と修復技術 (バチカン博物館修復師, G. Colalucci, 伊) [伊]
- ・英国中世壁画の保存材料としてのワックスあるいはワックスと樹脂の混合物; 理論と実際 (コートゥルド美術研究所壁画保存部, S. Cather, 英) [英]

18:30 レセプション (ポローニャ市主催, 於アキェルシオ宮殿)

第3日目

9:00~12:00 第3セッション

<座長> ローマセンター, アピ エレナ チャローラ (A. E. Charola, 米)

- ・博物館における石造品の保存の実際 (ナロドゥウ博物館, J. Lehmann, ポーランド) [英]
- ・エジプト石灰岩立像の保存における可溶性塩類の移動の影響 (大英博物館保存部, S. M. Bradley 他, 英) [英]
- ・アクリル樹脂の減圧含浸による劣化石の保存; 7年間の実績 (バイエルン州文化財管理局, R. Wihr, 西独) [英]
- ・パルマの洗礼堂のアンテラミ作石造彩色像の保存 (チェザーレニューディ国際財団, R. Rossi-Manaresi 他, 伊) [英]
- ・ボストン, イザベラスティワートガードナー博物館におけるバルトロメオ ジョルフィーノ作ベローナ調トリプティックの保存の問題点 (イザベラスティワートガードナー博物館, J. Soultanian 他, 英) [英]

12:00~13:00 ポスターセッション<後記>

14:00 見学 (研究所, 修理中あるいは修理直後の建造物, 他)

第4日目

9:00~12:30 第4セッション

<座長> ニューヨーク大学保存センター, ローレンス J. マジェウスキー (L. J. Majewski, 米)

- ・ペルーの植民地時代の日干しレンガ壁画; その保存と修復 (文化財保存協会建築部, R. Samanez Argumedo, ペルー) [英]
- ・夫婦の寝室のアンドレアマンテーニャ作の壁画; クリーニングと予備科学調査 (ローマ中央修復研究所, M. Cordaro 他, 伊) [伊]
- ・アジャンタ遺跡における壁画保存の問題点 (インド国立文化財研究所, O. P. Agrawal, インド) [英]
- ・タイにおける壁画の保存 (ローマセンター, P. M. Schwartzbaum 他, 米) [英]
- ・サンサバンスユールガルタンブの地下室の壁画保存における気象学的および水理地質学的研究 (歴史記念物研究所, M. Stefanaggi, 仏) [伊]
- ・ビセグラードの司祭長教会; 11世紀のフレスコ画の発見と剝取り保存 (ハンガリー歴史記念物管理局, F. Rady, ハンガリー) [英]

14:00~15:00 ホープス賞記念講演

- ・ペスシアフィオレンツィーナにある送風式溶鉱炉の保存 (ローマ大学教授, ジョルジョ トラッカ, J. Torraca, 伊) [英]

15:00~17:30 第5セッション

<座長> グロニンゲン大学美術史研究所, J. R. J. バン アスパーレンドボアー (J. R. J. Van Asperen De Boer, オランダ)

- ・ ウェルス大聖堂；1975年から1986年に至る人物石像の保存処置についての最終報告とその評価（カロエ&マーチン設計事務所，M. Caroe, 英）〔英〕
- ・ プラハのコールの泉：長期間水と接触状態にある石の保存（国立文化財修復研究所，J. Šrámek 他，チェコスロバキア）〔英〕
- ・ W. R. ハーストコレクションの石造物と彩色壁片の保存における接着剤としてのメチルメタアクリレート応用の（自営修復技術者，Z. Barov, 米）〔英〕
- ・ ミラノ，サンサティロにあるアゴスティーノデホンデュリス作のテラコッタ彩色像の保存および科学的調査（ミラノ文化財管理局，S. Bandera Bistoletti 他，伊）〔伊〕
- ・ エルミタージュ博物館における石彫像の修復に用いられている新しい方法（エルミタージュ博物館，M. N. Lebel, ソ連）〔英〕

20：00 晩餐会（チコーニャ家別邸）

第5日目

9：00～12：00 第6セッション

<座長> ロンドン博物館，スーザン V. キーン (S. V. Keene, 英)

- ・ 歴史的石造建造物の保存におけるエポキシ樹脂の有用性の評価（ニコライコペルニクス大学文化財保存研究所，W. Domaslawski 他，ポーランド）〔英〕
- ・ 岩石彫刻とルーン文字刻石の保存と修復（歴史博物館，T. Andersson, スウェーデン）〔英〕
- ・ アクロポリスの石造部材の修復における補強材としてのチタンの応用（アクロポリス保存委員会，C. Zambas 他，ギリシャ）〔英〕
- ・ 12世紀の石造仕切り飾の取り上げと保存の問題点；パーベック大理石の物性と関連して（英国遺産遺跡保護財団古代遺跡研究所，J. Price, 英）〔英〕
- ・ エジプトの彩色三つ組石像の保存処置における予備強化剤の選択について（ピーボディ考古民族博物館，B. J. Mangum, 米）〔英〕

12：00～13：00 ポスターセッション《後記》

14：00～18：00 エクスカーション（フェラーラ）

18：30 レセプション（於，フェラーラ，ディアマンテ宮殿）

第6日目

9：00～12：30 第7セッション

<座長> 英国遺産遺跡保護財団古代遺跡研究所，クリフォード A. プライス (C. A. Price, 英)

- ・ 熱帯地方における建造物石材の風化防止（ベルリン博物館群ラトゲン研究所，J. Riederer, 西独）〔英〕
- ・ 日本における磨崖仏の保存について（東京国立文化財研究所，西浦忠輝，日）〔英〕
- ・ ミラノのサンタマリア デレグラズィエ教会のラネの回廊の材質，劣化と修復について（ミラノ工業大学，G. Alessandrini 他，伊）〔伊〕
- ・ マツラーの斑点赤砂岩の調査と保存（インド国立文化財研究所，O. P. Agrawal 他，インド）〔英〕
- ・ ケアウィポール記念塔の保存について（自営保存技術者，M. R. Eastham, 英）〔英〕
- ・ 建築に用いられているアリゾナ赤砂岩の保存について（ロスアンジェルス美術博物館保存センター，J. Tweilly, 米）〔英〕

14：00～17：00 第8セッション

<座長> オーストリア美術アカデミー色彩化学研究所，フランツ マイリンゲル (F. Mairinger, オーストリア)

- ・ 18世紀大英帝国の建築彩色：調査と修復（建築コンサルタント，I. C. Bristow, 英）〔英〕
- ・ ロチェスター大聖堂：地下礼拝堂天井彩色の保存（コートールド研究所壁画保存部，D. Park,

英) [英]

- ・フィレンツェ, サンタマリアノベラ教会の中央礼拝堂のドメニコギルランダイオ作のフレスコ画の修復; 実際の作業と結果 (フィレンツェ修復研究所硬石工房, F. Bandini 他, 伊) [伊]
- ・ミュスタール修道院のカロリング王朝風およびロマネスク調壁画の劣化と保存<その1>; 劣化メカニズムと保存 (ETH 文化財保存研究所, A. Arnold 他, スイス) [英]
- ・ミュスタール修道院のカロリング王朝風およびロマネスク調壁画の劣化と保存<その2>; カロリング王朝風壁画の材料と描写 (美術アカデミー色彩化学研究所, F. Mairinger 他, オーストリア) [英]
- ・ミュスタール修道院のカロリング王朝風およびロマネスク調壁画の劣化と保存<その3>; 技法と材料および過去に行われた修復 (ETH 文化財保存研究所, O. Emmenger, スイス) [英]

17:00~17:30 閉会式

第7日目

オプション エクスカーション (1日ツアー)

Aコース: ラベンナ

Bコース: パルマ, フィデンツァ

《ポスターセッション》 [英]

- ・修復後20年の状態調査 (バイエルン州文化財管理局修復工房, J. Pursche 他, 西ドイツ)
- ・コペンハーゲンにある王のコレクションの石膏像; 劣化と修復 (王立美術博物館, J. Bau, デンマーク)
- ・エジプトの石灰岩彫刻の劣化 (大英博物館, S. M. Bradley 他, 英)
- ・建造物の保存を目的とした石の保存の問題点 (シエナ大学鉱物岩石研究所, A. Bralia 他, 伊)
- ・古い漆喰技法の研究における材質分析の役割 (ニコライコペルニクス大学文化財保存研究所, Z. Brochwicz 他, ポーランド)
- ・フランス, ラバルの布市場の凝灰岩製三角間 (チンパナム) の救済処置 (グルノーブル原子力研究センター, R. Coignard 他, 仏)
- ・16世紀の洗礼盤の含浸強化処置のための予備研究 (フランス芸術作品修復研究所, T. De Courville 他, 仏)
- ・石の含水率の非破壊測定 (ニコライコペルニクス大学文化財保存研究所, W. Domaslawski 他, ポーランド)
- ・ジェロラモ マツォーラ ベドーリ: '神の来降', ステッカータ教会, パルマ (パルマ, ピアチェンツァ文化財管理局, L. Fornari Schianchi, 伊)
- ・陽子誘導X線と陽子マイクロゾンデによるミラノのサンタマリアデラグラズィ教会のダビンチ作 '最後の晩餐' から採取したサンプルの調査 (ルール大学実験物理学研究所, B. Gonsior, 西独)
- ・デンマークの壁画 (美術アカデミー保存部, U. Hastrup, デンマーク)
- ・塗料を用いずに教会を色着けする方法 (美術品科学中央研究所, P. B. Hallebeek, オランダ)
- ・大聖堂の外部建築彩色 (自営建築家, A. Hulbert, 英)
- ・デンマークの壁画の保存 (国立博物館保存部, M. Jensen, デンマーク)
- ・二つの緊急事態 (自営修復家, M. M. Katkov 他, 英)
- ・壁画や石造建築部材の裏打ち用材料としてのエポキシ樹脂発泡体 (ロンドン博物館, S. Keene, 英)
- ・ダーンシュタイン; 1736年の塔の彩色 (連邦文化財局保存修復部, M. Koller, オーストリア)
- ・ビーンハウゼン (北ドイツ) の修道院の壁画の生物劣化についての経過と原因および処置方法について (オルデンブルグ大学地質微生物学部, W. E. Krumbein, 西独)
- ・大英博物館所蔵19世紀石膏像の保存 (大英博物館保存部, R. M. Loewenthal, 英)

- ・紋章のモザイク装飾の修復と新しい基材〔アエロラム；工業品ハニカムサンドウィッチ構造体〕への張り替え（国立美術研究所モザイク部，D. Roberto, 伊）
- ・壁画の保存材料としての酢酸ビニール樹脂（E. Marxen-wolska, ポーランド）
- ・エジプト第四王朝時代（BC 2560年）の漆喰壁片の裏打ち（大英博物館保存部，E. G. Miller 他，英）
- ・大英博物館におけるモザイク装飾の保存（大英博物館保存部，V. W. Munday, 英）
- ・ハンガリーで用いられているいくつかのクリーニング方法の比較試験（ハンガリー工業大学建築史研究所，E. Orcsik, ハンガリー）
- ・パヤーンの大聖堂の水分により損傷した15世紀の壁画の修復，及び水分による新たな劣化（自営修復家，A. F. Pelot, スイス）
- ・湿った壁への防水処置効果の判定方法（ワルシャワ工業大学，B. Penkala 他，ポーランド）
- ・アグリゲントの寺院の丘の南岩壁；風化形態と強化，修復処置（歴史建築研究所，G. Renda 他，伊）
- ・デンマークのロマネスク調壁画の修復；マースレット教会の約1200年頃のロマネスク調壁画（国立博物館保存部，K. Trampedach, デンマーク）
- ・アリゾナ赤砂岩の風化についての分析による研究（ロスアンジェルス美術博物館，J. Twilley, 米）
- ・マンチュアに見られるルネッサンス期の壁の熱帯調装飾（自営修復家，N. Zuccoli, 伊）

石の保存に関しては，石灰岩（大理石）の保存，修復に古代技法に則って製造された消石灰を用いる方法が最近のトピックになっている。開会式直後の最初の講演でローマ考古保存センターの若い研究者 Nardi 氏が，AD 203 年に建立されたローマ，セプティマスセベラスのアーチ門の消石灰水及び消石灰水とアクリルエマルジョンの混合物による保存，修復処置について報告した。この発表に対して，石の合成樹脂による保存処置研究の第一人者であるポローニャの Rossi-Manaresi 女氏が「我々の研究によって，アクリル樹脂（パラロイド B-72）とシリコーン樹脂（ドライフィルム）の混合有機溶媒溶液の含浸が極めて効果的であることがハッキリしているのに，何故これを使わないのか。我々の材料の有効性は15年間の実績が証明している。」と，かねて用意していたと思われる質問をあげた。それに対して Nardi 氏は，「我々の材料は多くの専門家が時間をかけて検討した結果採用したものである。15年間の実績というが，アーチ門の1800年の歴史に比べたら15年間など取るに足らぬ。」とバツサリ切り返したところ，会場から拍手が起ったのには驚かされた。

現在，石の強化はシリコーン樹脂の含浸処置が主流になって来ており，我国でも，筆者らの研究により，その有効性が確かめられ，専らこの材料が用いられている。その一方で，西独の Wühr 博士はアクリルモノマーの減圧含浸の研究を続けており，実際に多く処置を行っている。又，ポーランドの Domaslawski 教授はエポキシ樹脂の含浸を広く行っている。石の保存には多くの考え方，方法が混在し，研究は未だ未だこれからだと改めて感じずにはいられなかった。

同様のことは壁画の保存についても当然言える訳で，かなり基本的な点で異った見解，方法が報告されていた。

研究内容とは直接関係ないが，フランス歴史記念物研究所の Stefanaggi 氏の発表の際ひとつの事件があった。氏は伊語で発表したのであるが，発表が終るや否や某フランス人がフランス語で質問を始めた。それに対して Stefanaggi 氏はフランス語ではなくあくまで伊語で応答していたが，この間仏語は同時通訳されなかったので，やっとのことで座長が「会議用語は英語か伊語であるから仏語は遠慮されたい。」と言って質問を止めさせる迄のかなり長い間，仏

語を解さない多くの出席者（筆者もその1人）はつんぼさじきに置かれていた。かかる質問者の行為は、我々の感覚では非常識極まりないものであるが、質問を止められた時の彼の慚然とした態度からは一部フランス人に見られるフランス語に対する甘えが感じられ非常に不愉快であった。座長の制止の言葉に対して拍手が起ったのは当然であろう。かかる事態は今後我国でも起り得ることであるが、狼狽して急拠フランス語の通訳を捜すなどせず、毅然たる態度で臨むべきと考えるが如何であろうか。

3. お わ り に

筆者が海外での国際シンポジウムで発表を行ったのは今回で4回目であるが^{9)~7)}、回を重ねる毎に、文化財保存の研究の全体像がより明確に把握できて行くのを感じる。又、海外の研究者の知人が増えていくことは、今後研究を進める上での貴重な財産となるであろう。次回第12回 IIC 大会が我国で開催されるということは画期的なことであり、我国の保存科学も漸く国際的レベルに近づくつつあるという認識に立つと、今大会への我国からの参加者が僅か3名というのは、色々困難な問題はあるにしても、少なすぎるのではないかと感じざるを得ない。文化財の保存は国際的問題であり、我国の研究成果を積極的に海外に紹介して行くという姿勢が今後益々奨励されて然るべきであろう。

最後に、今大会における研究発表を準備するにあたり種々御指導、御助力を賜った、東京国立文化財研究所、伊藤延男所長、同修復技術部、樋口清治室長、増田勝彦室長、同保存科学部、三浦定俊主任研究官の各氏に深く感謝致します。

参 考 文 献

- 1) 関野 克；「文化財と建築史」鹿島出版会，52-64（1969）
- 2) 三浦定俊；“IIC 大会と ICOM 保存委員会大会出席報告”，日本文化財科学会会報 No. 6，13—15（1985）
- 3) 三浦定俊，西浦忠輝；“IIC 大会と ICOM 保存委員会大会に参加して”，保存科学24号，105—107（1985）
- 4) Nishiura, T., Fukuda, M., and Miura, S., ‘Treatment of Stone with Synthetic Resins for Its Protection against Damage by Freeze-thaw Cycles’, in Adhesives and Consolidants, IIC, London (1984) 156—159
- 5) Nishiura, T., ‘Conservation of Rock-cliff Sculptures in Japan’, in Case Studies in the Conservation of Stone and Wall Paintings, IIC, London (1986) 155—158
- 6) Nishiura, T., ‘Conservation of Old Rooftiles for Reuse’, in The Conservation of Stone II, Centro Cesare Gnudi, Bologna, 699—709 (1981)
- 7) Nishiura, T., ‘Experimental Study on the Adhesive Strength of Lacquer Coating’, 7th ICOM Meeting Copenhagen (1984), 16.1—16.7

Participation in the 11 th IIC Congress

Tadateru NISHIURA

The 11 th IIC Congress was held in Bologna, Italy on 21—27 th of September, 1986. The author attended the congress and presented his paper entitled “Conservation of Rock-cliff Sculptures in Japan”. About 500 people from 29 countries participated, and 44 papers and 30 posters were presented in the congress. The program of and the author’s remark to the congress are reported.